
消えた日常と僕

SeaR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた日常と僕

【Zコード】

Z2275E

【作者名】

SeaN

【あらすじ】

無職の父は無能で、駄目人間だった。いきなり入った会社の社長の命令で会社近くの家を借りて住む事に。転校した高校は金持ち限定高校で、家にはメイド付き。メイド曰く、この近辺の一部の住民は奇天烈な力を持つらしい。僕の日常はどうなっていく…？

プロローグ・新天地と僕（前書き）

この小説のジャンルは
恋愛、ファンタジー込みの青春爆発学園系です。（何だそりや）

プロローグ・新天地と僕

「おい、就職先決まつたぞ…端山市だ！」

と父親が俺に言つてきたのは三日前の夕方だった。

家で唯一の稼ぎ頭だった母は既に他界し、三年経つた。

父は高卒の無職で働く氣無しだったものの、母の他界後は就職活動に毎日を費やしていた。

だが、人手の多いこの時代、無名の高校を卒業しただけでは厳しく毎日のように

「今日はだめだつたよ利之、明日はきつと…」

と繰り返し言つていた。

端山市というのは僕の住む市から電車で一時間程度の場所で、母の出身地だった。

ここより田舎臭い風景と一両編成の電車は今でも覚えている。

「…で、悪い利之、入学して一ヶ月だけ転校してもらひうよ

「…はい？何だつて？」

「社長の好意で近くの家を借りたのさ、…子供連れてつて条件で

「…ぼ、僕は認めないっ！」

「残念だよ、…さつき食べた夕食に睡眠薬がつ…！」

「な…何…を…」

ばたつ

…意識を失うのは思つたよりも早かつた。

田を覚ました時にはすでに引越し済みだった。

見慣れた家具は未知の家に綺麗に整列していた。

「…うう、くそ…」

「ここはどこだ…？」

周りを見たところ、自分の部屋に置いてあつたものだけだ。

「ここ、自分の部屋？」

十畳分ぐらいの広い部屋、ふかふかベッド付き（私物ではない）且つシャンデリア付き。

「この高級ホテルと聞いたくなるような部屋。」

「本当にここ…どこだよ。」

起き上がつてドアノブを回す。

「おおう、起きたか。凄いだろ」

「凄いって問題じゃないって…、ここへ借りた家つて」

「そうだ、…社長の別荘だつて」

「何で父さんみたいな人にこんな豪邸を…」

「『お前は我が社に多大な幸運と利益を齎す』…だってさ」

「…とても高卒で就職経験無い人に言う台詞じゃないよ？」

「言われたものは仕方ないだろ？」

「…で、僕の学校は？」

「私立萩山高校だと。…俺の知ったところじゃないな」

「待て待て、そこは金持ちと優等生だけの超高レベル高校だ。絶対違うつて」

「はい、入学届け。…ま、頑張つてくれ」

入学届けと大きく書いた紙には『萩山高校』と書いてある。

「マジ？」

僕は去つていった父の背中を見つめ、つぶづぶ思ひつ。

「入社時に何があつたのだろう、と。」

プロローグ・新天地と僕（後書き）

頭の中で爆発した想像も文に書くと難しい……。
批評や意見は常にお待ちしています。

第1話・メイドと僕

夢を見ていた。

横断歩道の中央で転倒した老人を助けたところ、何と大規模な会社の社長だったのだ。

命の恩人の僕は会社の重役につき収入もうはうは、勝利の人生を約束されたのだ。

そして愛犬ポチとの散歩の途中、いきなり地面に穴が空き真っ逆さまに。

頭から地面と思えない黒い空間に頭を打ち、目を覚ました。

目を開けた先には横になつて一部崩壊したベッド。

そして僕を軽蔑の目で見る謎のメイド服の女性。

左手に持つたトレイには紅茶と朝食と判断したものが入つていた。

「……、待て、不法侵入だぞ！？」

うーむ、よく見ると僕は微妙に横たわったベッドの上で壁に頭を向けているのだ。

：この謎のメイド服がベッドを卓袱台返しの如く僕ごと壁に叩きつけたに違いない。

：つて絶対それはないだろう。

華奢な体にそこまでの力を出せそうな気はしない。

：というよりほつそりしていてお嬢様タイプだ。

凄く薄い紫色のポニー・テールは僕にはぐつときた。

：待て、何だあのヘッドドレスの間の白いものは…。

近代の最終兵器、『ネコ耳』ではないか。

以上のことより結論を出す。また夢か。

「…ぐう」

「ご主人様、ぶつ飛ばしますよ？」

待てい、夢じやないじゃ ないか。

「いや、すまない。どうも僕の前にネコ耳メイドといつて云説の生命

体が見えるのだが」

「私の前にはご主人様という靈長類最悪の生物が見えますね」

「メイドとして主人を靈長類扱いとか酷いと思つ。…とこうより主

人つて僕？」

「はい、本日を持つて貴方に仕える事になりました、名前は…別にいいですよね」

「どうもよろしく。でも名前は知りたいな」

「ご主人様に教える名など持ち合わせてないです。…必要ならば三枝さんざいと及びください」

「…失礼すぎだと思うナビ」

「気のせいです。わざわざ食事を食べて居間に来てください。車を用意します」

「着替きりかえは？」

「そここのタンスに入っています。今日は校長との面会ですので相応しいと思う服を選択してください」

タンスを開ける。

そこにはメイド服、チャイナ服他、マニア向けの服が沢山入つていた。

「…これ着ていけど?」

「校長はそつち系の趣味の持ち主ときいて用意しました。三枝を褒めてください」

「…男が着てもキモいだけだよ?」

「私の知つたことじやないです。…不満ならば右側のタンスを。今までのご主人様の安価でとてもお洒落と縁のなさそつな服が無造作に放り込まれてます」

タンスを開ける。

「これは酷いとしか言えない。

ぐちやぐちやというのを通り越して妙な芸術性を醸し出している気持ち悪い服のオブジェ的なものが出来ているのだ。

「…ねえ三枝さん、これは一体？」

「私の最高傑作の一つ『叫び』です。…どうです？」

自慢げにやたら大きな胸を反らす三枝さん。

勘弁して欲しい。

「…壊しますよ？」

「どうぞ。別に適当に弄くつていただけですし…」

服の塊の中から中学生の時に使っていた制服を取り出す。

…皺だらけでどうしようもない。

制服をベッド（＾＾）の上に置きつつ、僕はトレイの上の朝食を手に取る。

ご飯、味噌汁、焼き鮭、そしてゆで卵三つ。

「…三枝さん、このゆで卵は？」

「一つはノーマル、一つは中に七味唐辛子を、一つは中に山葵を入れました」

「僕、食べないよ？」

「一つだけで良いので食べてください。今日の車の運転手は三枝です。…学校に遅刻、最悪の場合行けなくなりますよ？」

「どうしてそこまで僕を陥れよつと…」

「ご主人様が面白いからです」

そう満面の笑みで答えた三枝さんは子供のように無邪氣だった。

「そうそう、ご主人様。間違えて予定より一時間早く起こしてしまいました」

「…はい？」

「時間に凄く余裕があるという事です」

「絶対わざとだよね？」

「気のせいです。…さて、ご主人様。三枝は車を用意しておきます。ご主人様は朝食を食べたら適当に寝ていてください。制服にはアイロンをかけておきます」

そう言つて三枝さんは部屋を出て行く。

新しくきたこの家には有能で無能なメイドもついているようだ。

まず、鮭と味噌汁をおかずご飯を完食。

残りは最大の敵、ゆで卵だ。

三つのゆで卵を全て半分に割る。

一つは黄身に赤い粉末、一つは黄身 자체変色して微妙に黄緑っぽくなっていた。

「ふ、この勝負は僕の勝ちだ」

勝利を確信し普通そうなゆで卵を口に運ぶ。
途端、舌が焼け付くような痛みを感じた。

抜け目のないメイドはからし入りを用意していたのだ。
くそう、こうなつたら不貞寝だ…。

第1話・メイドと僕（後書き）

最初は純情なメイドの予定だったのです。
失敗した…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2275e/>

消えた日常と僕

2010年10月9日07時55分発行